



■色川武大(阿佐田哲也)

一関に惚れて移住したが、最期の地になってしまった。



展示室の一部



ご案内

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 毎週火曜日(12月30日～1月3日休館)
入館料 無料(館内の募金箱にご芳志を)
ただし「酒の民俗文化博物館」は有料



交通案内 ◆JR一ノ関駅より徒歩10分
◆一関ICより車で約15分



いちのせき文学の蔵

〒021-0885 一関市田村町5-42
世嬉の一酒の民俗文化博物館内
☎0191-26-1040



東北最大級の酒蔵・登録有形文化財
この中に日本一小さな文学館「文学の蔵」はあります

いちのせき 文学の蔵

北上川、一岡中學生たりし頃常に歩き、啄木を愛誦せし径あり
柳散る昔啄木のまた我が径

言葉の力を信じて

わたくしたちは、文学による心の街起こしをモチーフに、「文学の蔵」という公設民営の文学館づくりの市民運動を、平成元年から続けてきました。このたび自力で開設した当ギャラリーは、日本一小さな文学館ですが、これからの運動の拠点にしていきたいと考えています。

一関は、古都平泉への文人の頻繁な訪れ、藩制時代からの学問・文芸の伝統、近代初頭における大槻文彦『言海』刊行の偉業など、豊かな文化水脈の慈育のせいか、多くの文学者を輩出しており、ゆかりの文学者も多彩で、不思議な文芸トポスの観があります。

展示しているのは、そのごく一部ですが、「言葉の力」を信ずる文学者たちの営為に触れて、言葉を鍛え、磨き、生きることの大切な意味合いを探っていただければと念じております。みなさんのご来館をお待ちしています。 [2006年4月22日開館]

酒蔵に文学の蔵？

◆ゆかりの島崎藤村と井上ひさし◆

当館は、東北最大の酒蔵を活用した世嬉の一酒の民俗文化博物館の中に設けました。ここは、かつて「熊文」という東北有数の酒造家があった所。そこへ明治26年秋、若き島崎藤村が寄寓したことがあります。また、昭和24年には、中学生だった井上ひさしさん一家が、土蔵を借りて暮らしたことがあります。藤村文学碑も建つゆかりの地なのです。

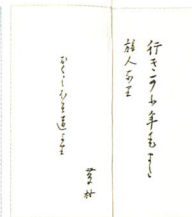
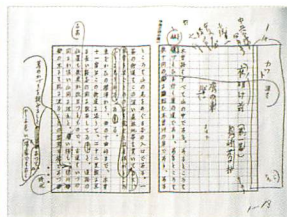
◆来た、見た、語った、飲んだ◆

藤村だけでなく多くの文人が、この地に足跡を残しています。古くは幸田露伴・北村透谷。文学の蔵の運動が起きてからは、色川武大・井上ひさし・大岡信・丸谷オ一・高井有一・古川薫・高田宏・谷川俊太郎・松谷みよ子・金子兜太さんらが、ここで語り、飲み、市民と交流しました。

◆蔵にかくされている何か◆

一関は、地方小市としては不思議がられるほど文学者を輩出しています。展示した12名はみなこの蔵にゆかりがあります。酒蔵は美酒を醸し出す大きな抱擁の器ですが、文学もまた作品生成の過程で醸成の長い時間を要します。また蔵には「蔵す(かくす)」という意味があり、財物だけでなく、何か(可能性)が蔵されているという深いイメージがあります。さて、文学の蔵には何が蔵されているか。

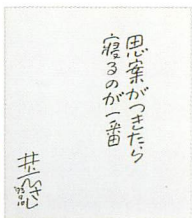
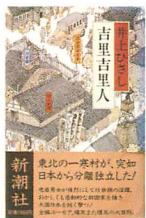
展示資料より



■島崎藤村

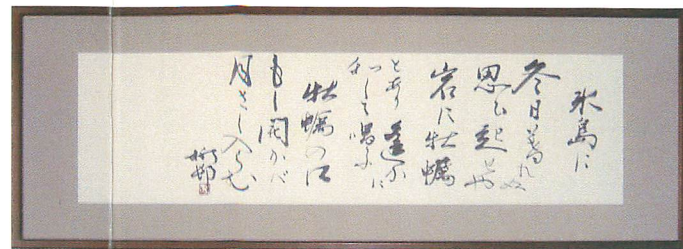
明治26年秋、21歳の若き藤村は傷心の身で一関を訪れた。この写真は、東京を発つ直前に撮ったもの。

一関で書いた色紙



■井上ひさし

一関中学3年生のころ、この蔵のあたりでよく遊んだ。蔵の一部にあった「新星映画劇場」でたくさん映画も見えた。



■三好京三

『子育てごっこ』で直木賞。一関高校に光瀬龍と汽車通学した。



■光瀬龍

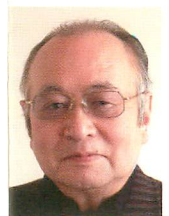
SF小説の先導者。日本SF大賞に輝く。人類に捧ぐ滅亡の詩! 無常の運命的宇宙観を根源に 虚構と現実の作風が立つ本格SF!



■遠藤公男



■及川和男



■内海隆一郎

一関出身の多彩な作家群像



■中津文彦



■星亮一



■馬里邑れい